

□ 書評 □

Brian R Mulligan 著
細田多穂・藤縄 理・赤坂清和・亀尾 徹 監訳

マリガンのマニュアルセラピー

竹井 仁
(東京都立保健科学大学保健科学部理学療法学科)

セラピストにとって、徒手療法は体機能異常に対する有効な治療手技の1つである。なかでも関節モビライゼーションは、関節機能異常に対して用いられる。関節モビライゼーションは大きく3種類に分類される。1つ目は、セラピストが他動的に患者の関節を動かす Kaltenborn や Maitland に代表されるような方法、2つ目は、関節機能異常の原因となる筋群を、患者自身の等尺性筋収縮後弛緩を利用して自動的に関節のアライメントを正常化する Muscle Energy Technique、そして3つ目が、患者が症状を出す姿勢と動作を、痛みを出さないようにモビライゼーションしながら行ってもらう Mulligan Concept である。

本書は3部構成になっている。第1部は、脊椎、仙腸関節、胸郭を中心としたモビライゼーションとその他の手技からなる。手技は、NAGS(Natural Apophyseal Glides: 椎間関節自然滑走法)、SNAGS(Sustained NAGS: 持続的椎間関節自然滑走法)、MWMS(Mobilisations with Movement: 運動併用モビライゼーション)、そして患者自身で実施する SELF SNAGS に代表される。これらのほとんどは、患者が体重を支持した状態で治療するのが特徴である。体重を支持しないで行う手技では、患者が直立位に戻った途端に得られた治療効果が半減してしまうこともあるからである。第2部は、四肢関節における運動併用モビライゼーションテクニック、第3部は、四肢関節の圧迫治療、PRPS

(Pain Release Phenomenon Techniques: 疼痛解放現象テクニック)、その他の四肢の治療法からなる。

本書の特徴は実技についての解説が多く、会話調の文章になっている点である。日本語訳としても原著のニュアンスを損なわないような訳に仕上がっており、読み手としては肩の力を抜いて楽しめる内容になっている。ただし、Mulligan 自身が言っているように、本書の読者には、徒手療法の禁忌を完全に把握していることや、解剖学とバイオメカニクスについての正しい知識を持っていること、操作と指示する技術に自信があることなどが求められている。裏を返せば、これらの点については暗黙の了解として記載していない点も多く、理論的な背景を本書から読みとるには知識と経験が必要である。しかしながら、このような点を差し引いても、技術の解説書としては非常に役立つものと言える。もう1つの Mulligan Concept の特徴としては、「押しても駄目なら引いてみる」的な考え方にある。Mulligan Concept の数多くある手技の中でも、より適切な手技をいかに適用していくかが簡潔明瞭に解説されており、もし他の徒手療法が効果的な場合にはそれを薦めている点は共感が持てる。本書を参考にすれば、ある程度の手技を実践可能とは思いますが、それは読者の力量にもよる。本書の訳者でもある藤縄理氏の尽力によって、Mulligan Concept のコースは日本でも受講可能である。本書で興味を持たれた方には是非受講をお薦めする。

Mulligan, 後ろから綴れば Nagillums, 長いので縮めれば NAGS, イニシャルに適切な意味を当てはめれば Natural Apophyseal Glides, なかなかおもしろい裏話である。

●A5判 204頁 写真95 2002

定価(本体2,800円+税)、送料310円

協同医書出版社・刊